

ウィズコロナ時代の災害ボランティア



巻頭言

渥美公秀*

Disaster Volunteers in With-Corona Era

Key Words : Disaster Volunteers, COVID-19, With-Corona Era

神戸大学の教員として、当時住んでいた西宮市で阪神・淡路大震災に遭遇し、それ以来、国内外の被災地で災害ボランティア活動に身を投じ、救援、復興、防災に関わる実践と研究を重ねてきた。今や災害が発生すればボランティアの姿が想像できるほどに、災害ボランティアは日本社会に定着したように思う。しかし、災害ボランティア活動にはまだまだ改善の余地（例えば、災害ボランティアセンターのあり方）があるし、多様なマイノリティへの対応についてはまだ緒に就いたばかりとさえ言える。議論の続く中、最近では新型コロナウイルス感染症の蔓延により、災害ボランティアの活動が改めて見直されている。ここでは、ウィズコロナ時代のボランティアを含んだ災害対応について考えることを通して、災害ボランティアの本質に迫ってみたい。

コロナ禍の中、各地の水害被災地（例えば、2020年熊本県人吉球磨地域水害）では、災害ボランティアが圧倒的に少なかった。新型コロナウイルスに感染させてしまうリスクと感染するリスクを考慮すれば、被災地に赴いて災害ボランティア活動することは慎むべきだという議論があったからである。被災地では、災害ボランティアの数が圧倒的に少ない状況が続いた結果、被災地の人々は片付けをはじめとする重労働に疲弊し、復興へのあきらめさえ生じかねないという事態が発生した。一方、災害ボラ

ンティアによる救援物資の配布などの救援活動が乏しかったために、現地に古くから存在した互助システムが作動する可能性が浮上したりもした。例えば、ある被災地では神社や商店の一角に物資等を置き、自由に持ち帰れるようにすることが、互助のシステムとして機能した。もちろん、新型コロナウイルスに加えて、さらに水害で困っておられる人々を見捨てるわけにはいかないのだから、こんな時こそ感染予防を徹底した上でボランティア活動を展開すべきだという議論もあった。実際、感染対策を徹底して現地を訪れて活動したボランティアも数多い。ウィズコロナ時代を見据えたとき、災害ボランティアは被災地に行くべきなのか、行くべきではないのか。両議論を天秤にかけたとき、どちらに傾くだろうか？



床上浸水の家の中を掃除する人間科学研究科の学生と災害NPO（2018西日本豪雨）



© Tepei Yoshinari

* Tomohide ATSUMI

1961年8月生まれ
大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程・ミシガン大学大学院（1993年）
現在、大阪大学 大学院人間科学研究科教授・研究科長・学部長
Ph.D.（ミシガン大学）
専門/グループ・ダイナミックス
TEL：06-6879-8000
E-mail：atsumi.tomohide.hus@osaka-u.ac.jp

災害ボランティアは、何をするために被災地に駆けつけるのかという原点の問いを改めて考えてみる。筆者は、「ただ傍にいる」ことこそが災害ボランティアの本質であると様々な場面で強調してきた（例えば、渥美、2014）。ところがコロナ禍においては、傍にいることこそが他者に脅威となる。徹底的な感染予防を施したとしても、不安は払拭できない。

となれば、いったい、そこまでして災害ボランティアが被災地に行こうとするのはなぜだろうか。また、そもそも災害ボランティアは現地で何をしているのだろうか。災害ボランティアにしかできない、災害ボランティアならではの活動とは何だろうか。実は、それこそが、「ただ傍にいる」ということである。

災害ボランティアは、遠くからでも、時間をかけてでも被災地を訪れ、見ず知らずの被災者にいわば無根拠に関わる。そこには金銭のやりとりが生じないばかりか、金銭のやりとりでは味わうことのない充実感がお互いの間に漂う。このように、災害ボランティアは、不特定の人々に無根拠で時間や空間や物を贈与していく存在なのである。このことを象徴的に示す言葉が「ただ傍にいる」である。

われわれの日常生活においては、通常は、何かをするために人と接触する。「ただ傍にいる」といったことは、日々忙しく効率を高めることに邁進する中で、あまり起こらないし、好ましくもなからう。言い換えれば、効率優先の社会において、「ただ傍にいる」というのは、極めて非日常的である。だからこそ、災害ボランティアが「ただ傍にいる」ということは、効率や利得といったことに縛られない別の人間関係のあり方を思い出させてくれる契機となる。大仰に言えば、災害ボランティアが「ただ傍にいる」ことは、社会のなかで隠蔽されてしまってきた人間関係の萌芽を改めて感得する契機となる。



仮設住宅で足湯 (2011東日本大震災 岩手県野田村)

災害ボランティアは、泥かきをする労力だけではない。そうではなく、災害後の新たな社会構築の場面において、新しい人間関係の可能性を告げる活動である。ここに全ての人々が生きがいを育むことのできる社会を創造していく1つの道筋を見ておきたい。災害ボランティアは、「ただ傍にいる」という単純なことが、日常ではあり得ない関係であっても存在しうるのだということを伝えるために現地に行く。感染リスクと天秤にかけるのはこのことであろう。

